

備前緑陽高校におけるセラミック教育に関する取り組みと課題

岡山県立備前緑陽高等学校

今井 直子

1. はじめに

岡山県立備前緑陽高等学校は備前高等学校と備前東高等学校の再編整備によって開校しました。

平成30年で創立16年を迎えます。前身の備前高等学校は60年の歴史があり機械科・窯業科をもつ工業高校で、その流れを汲んで教育課程の中に工業科目とセラミック分野、備前焼、虫明焼の科目を開講しています。

JR赤穂線の西片上駅から徒歩5分の位置にあるため全体の77%が電車通学で、岡山市内からの通学者も多くいます。

2学期制の単位制総合学科として、生徒1学年160人、全校で約480名が学んでいます。コース制は取っておらず、特別進学(通称SV)、普通進学、健康福祉、情報・ビジネス(商業)、工業(機械・電気・化学)を科目選択の際に系統立てて履修するスタイルとなっています。クラス編成は各学年5クラスとし、選択講座は約150講座あるため、少人数学級、習熟度制を取り入れた教育活動を行っています。

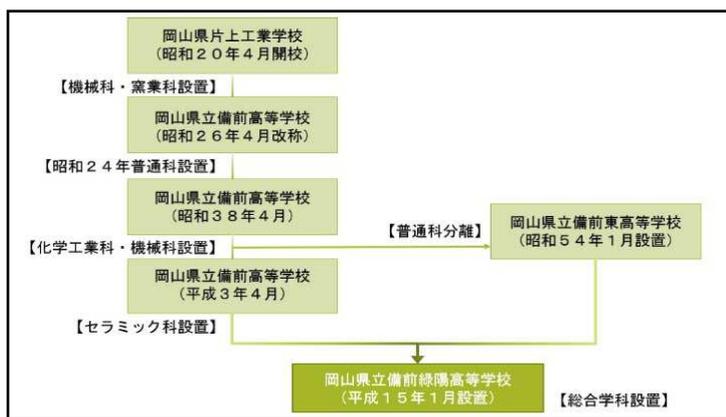


図1 沿革

2. セラミック教育に関する科目

図2のように、セラミックに関する科目は総合科目に6つ、総合的な学習の時間、工業科目に4つ開講しています。担当は工業(工業化学)の教員3名と非常勤講師の3名です。非常勤講師は備前焼、虫明焼、ガラス工芸について専門の作家さんに来て頂いています。

科目	1年次	2年次	3年次
総合	備前焼研究α(2)	備前焼研究β(2)	備前焼研究γ(2)
		陶芸の歴史と文化(2)	
		虫明焼研究(2)	
		ガラス工芸(2)	
総学		総合的な学習の時間(2)	総合的な学習の時間(1)
工業		陶芸実習基礎(4)	陶芸実習応用(4)
		セラミック化学(2)	セラミック工業(2)

図2 セラミック教育に関する科目

3. セラミック教育に関する取り組み

(1) 岡山セラミックスセンターとの連携（工業化学）

- 工業化学選択 2 年次生によるセンター見学会実施。
- 総合的な学習の時間での備前焼研究に関する試料分析依頼。



図3 センター見学



図4 総合的な学習の時間

(2) 機械選択者による油圧式薪割り機の製作（機械）

- 窯焚きで使用する松割木は大割小割合わせて約 500 束を使用する。ここに注目した機械選択者が総合的な学習の時間の取り組みの中で製作し、平成 27 年に完成。

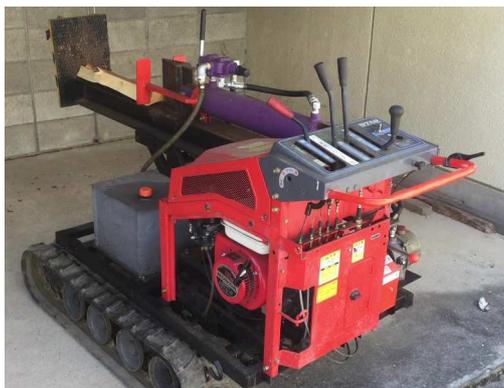


図5 薪割り機



図6 イギリス人作家陶芸体験

(3) イギリス人作家陶芸体験（生徒有志）

- 備前市観光課との連携によりイギリス人作家による陶芸体験。

(4) オープンスクールでのろくろ体験（工業化学）

- 中学 3 年生を対象にろくろ体験を実施。

(5) PTA・教職員作陶体験（PTA、教職員有志）

- 平成 26 年～3 年間実施。緑陽祭や 10 月の定期考査期間を利用した作陶体験。



図7 備前ロータリークラブの窯元にて

(6) 備前ロータリークラブによる作陶体験（生徒有志）

- 平成 27 年度に備前ロータリークラブ所属の備前焼作家の元での作陶体験。

(7) 陶芸部と緑陽祭（陶芸部員）

- 現在 2 年生 5 名による活動。
- オープンスクールでの中学生作陶補助。
- 緑陽祭での展示即売。



図 8 緑陽祭での展示即売の様子

(8) 草加デイケアセンターとの交流会
（福祉、虫明焼研究）

- デイケアセンターの方との交流とリハビリを兼ねての虫明焼作陶会。事前案内、準備から焼成、作品を届けるところまでを行う。



図 9 草加デイケアセンターとの交流（虫明焼）

(9) ふいご祭り（教職員）

- ふいごと備前焼の窯を祀る祭りを毎年 12 月に実施。

(10) 窯焚き（工業化学、教職員、生徒）

- 毎年 2～3 月に実施。セラミック科目選択者、工業化学選択者、陶芸部員も参加。



図 10 ふいご祭り



図 11 窯焚きの様子



図 12 炭入れ

4. 課題

(1) 複雑な履修体系と授業の開講

単位制の総合学科であるため、セラミック科目を選択する生徒が科目ごとに異なります。そのため、専門科のような一貫した教育活動は行えません。備前焼の科目は継続履修となっているものの、翌年に必ず履修しなくてもよいため、技術指導もむらが生じます。また、受講人数が集まらない場合は開講されないこともあります。昨年度は陶芸実習基礎の受講者が0名だったため、本年度の陶芸実習応用（継続履修科目）が開講されていません。本年度はできるだけ備前焼の科目履修生を集め、来年度継続科目が開講できるよう取り組んできました。しかし、次期教育課程を計画して行くに当たり、講座開講の条件が今以上に複雑になると予想されます。

(2) 専門技術を持った職員の確保、配置

実技指導や窯をはじめとする施設・設備の管理は、その道の経験者でなくては難しい内容です。幸い現在は窯業科OBの教員および備前焼の非常勤講師が、本校で長く備前焼指導を行っています。しかし、先に述べたように講座開講は履修状況に依存するため、講師の授業時間数の変動や事情による代員確保は恒常的な課題となります。また、セラミック関連の教育活動は工業化学職員が行うため、一連の情報共有および技術伝承が県下工業化学職員の課題でもあります。今年度、このことについて岡山県の工業化学系部会で取り上げ、部会研修会を本校の備前焼をテーマに実施することになりました。課題解決に向け、まずは第一歩を踏み出すところですが技術の習得には時間がかかります。本校の歴史や総合学科であることを踏まえたうえで地域からのニーズを理解し、さらに時代に合った教育を続けていくためにもこの研修会を継続していくことが必要になってきます。

(3) 産業と学校の関わり

備前市内に備前焼窯は313登録されています。耐火物製造企業は11社あり、備前市の主要産業です。このような地場でありながら、セラミックスへの関心が薄れているのも事実です。伝統工芸、地域産業と本校の連携、そしてセラミック教育の活性化が望まれます。総合的な学習の時間での取り組みや、地元産業の魅力発信として一昨年から開催されている備前市産業フェスタへの参加など、機会を上手く利用していかねばなりません。

5. おわりに

本校のセラミック教育は六古窯という地域特性を生かし、伝統産業の火を絶やさぬよう開校した備前高等学校からの流れを汲んでいます。総合学科になり、多様な選択科目を抱える中でも備前焼をはじめとするセラミック教育を絶えず続けていることは、我が校の誇りであり伝統であると考えます。時代の変遷とともにその在り方も変化し続けますが、一つずつ課題を解決しながら備前の地でセラミック教育を続け、それを未来へ繋げていきたいと考えています。